

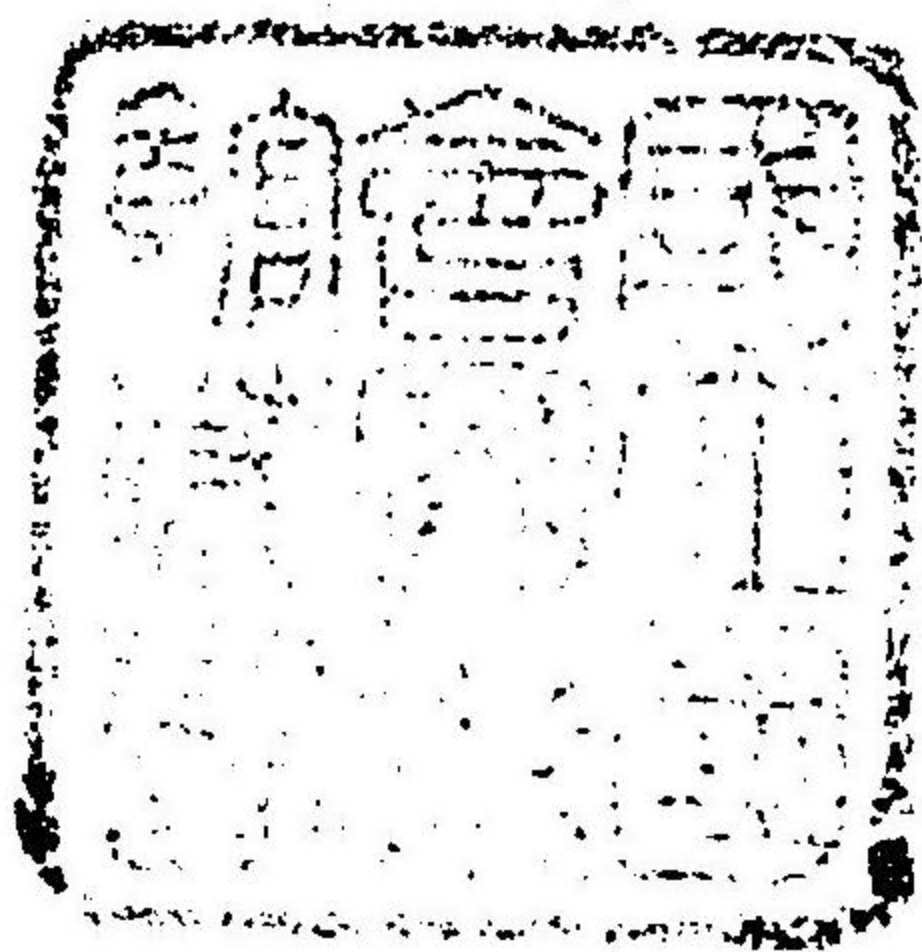
平城坊目遺考

金澤昇平著

下

291.65

Ka373h



223886

平城坊目遺考卷之下

目録

●佛閣之部

○東大寺

大佛殿由來○南大門石獅子之原由○二月堂
○法華堂○戒壇院○真言院○知足院

自八一丁

○興福寺

當寺伽藍之原由及沿革
○炎上再建略記○新能濫觴

自十九丁
至十七丁

○元興寺

諸堂廢亡趾○小塔院○極樂院
○十輪院○金胎寺

自十七丁
至廿一丁

○璉戒寺濫觴

福智院地藏堂及清水寺の原由

自廿一丁
至廿二丁

如左

○新藥師寺
 ○般若寺
 ○十念寺
 ○崇德寺
 ○興福院
 ○瑞景寺
 ○不退寺
 ○本元興寺
 ○禪定院
 ○鶴福院

●廢寺之部

二十三丁ヲ
 二十三丁ウ
 二十四丁ヲ
 自廿四丁ヲ
 自廿四丁ウ
 自廿五丁ヲ
 自廿五丁ウ
 二十五丁ヲ
 自廿五丁ヲ
 自廿五丁ウ
 自廿六丁ヲ
 自廿六丁ウ
 自廿七丁ヲ
 自廿七丁ウ
 二十七丁ヲ

○千藏院
 ○神宮寺
 ○神野寺
 ○香山堂
 ○天地院
 ○龍華樹院
 ○遍昭院
 ○光明院
 ○寶積院
 ○華林院
 ○伴寺永隆寺跡

全
 二十七丁ウ
 全
 自廿七丁ヲ
 自廿八丁ヲ
 二十八丁ヲ
 二十八丁ウ
 二十八丁ウ
 自廿九丁ヲ
 自廿九丁ウ
 三十丁ヲ
 全
 全
 自三十丁ヲ
 自三十丁ウ
 卅一丁ウ

- 塔之内町 三十八丁ヲ
- 公納堂町 全
- 花崗町 三十八丁ウ
- 瓦堂町 三十九丁ヲ
- 綿附草綿濫町 自卅九丁ヲ至四十丁ヲ
- 治田辻 四十丁ヲ
- 阿字万字町 全
- 南中町 四十丁ウ
- 宮下町 全
- 北法蓮町 四十一丁ヲ
- 多門町 四十一丁ウ

平城坊目遺考卷之下

佛閣之部

金澤昇平編集
橋井善一郎校閱

東大寺

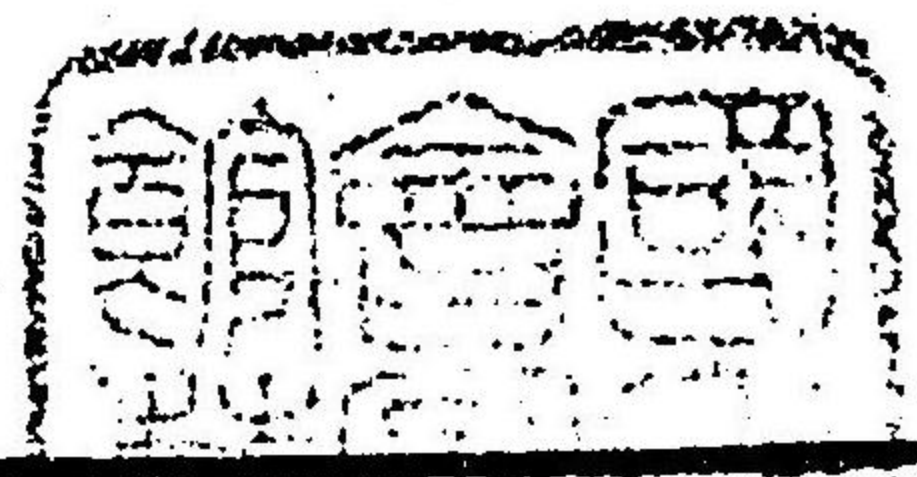
大華嚴寺又恒說華嚴寺國分寺
金光明四天王護國寺城大寺と云

當寺ハ聖武天皇の御願にして八宗兼學大梵刹なり

大佛殿 日本總國分寺

金銅毘盧舍那佛座像

- 長五丈三尺五寸 腹長一丈八尺
- 面長一丈六尺 肘至腕長一丈五尺
- 廣九尺五寸 掌長五尺六寸
- 眉長五尺四寸五分 中指長五尺
- 目長三尺九寸



鼻前經二尺九寸四分
全高一尺六寸

口長三尺七寸

耳長八尺五寸

肩長二丈八尺七寸

胸長一丈八尺

臂長一丈九尺

後光一基高八丈三尺
橫二丈五尺厚五尺

化佛十六躰長自九尺
至八尺

脛長二丈三尺八寸五分

膝前經三丈九尺
厚七尺

螺髮九百六十六各高一尺
經六寸

蓮華銅座大小五十六枚高各一丈經六丈八尺

右鑄料

熟銅七十三萬九千五百六十一斤

練金二萬四百四十六兩

白鐵一萬千六百十八斤

水銀五萬八千六百二十兩

炭壹萬六百五十六斛

脇士左如意輪觀音

右虚空藏菩薩

各長二丈五尺
大佛圓顯慶作

化佛後光同作

毘沙

門天殿內
長隔

廣目天

殿內
乾隔

安永三年より六ヶ年の間に成りし作人不詳

堂間敷

東西二十八間六尺二寸南北二十五間四尺三寸高二十四間余柱數六

十本太經自四尺一
至五尺五寸

石壇上東西三十四間二尺五寸
南北三十間五尺高五尺

續日本紀曰天平十五年十月十五日聖武天皇發菩薩大願奉造廬舍那佛金銅像一軀同月乙酉皇帝御紫香樂宮爲奉造廬舍那佛像始開寺院同年十一月壬申甲賀寺始建廬舍那佛像體骨柱天皇親臨手引其繩云々されとも事ならず同十七年五月戊辰行幸平城同年八月大像を鑄させ給ふ天平十八年十月甲寅天皇太上天皇皇后行幸金鐘寺燃燈供

養盧舍那佛、佛前前後燈、一万五千七百餘杯、夜至一更云々、天平二十一年二月丁巳、陸奥國より始貢黄金、亦盧舍那佛の大像を金色ふなすへき黄金を集め給ふよ、本朝未だ黄金なしいくほどなく、陸奥守從三位百濟王敬福、貢黄金九百兩、天平勝寶元年夏四月甲午朔、天皇幸東大寺御盧舍那佛前殿云々とあり、此時開眼供養、導師菩提僧正、咒願師道濟律師、講師隆尊、讀師延福とそ、最初供養の時、行基菩薩と導師にと、宣下を給ひしが、加程の導師凡僧の身に應せぬこと、辭し申されしとなん、天平勝寶四年大殿落成、訖稱東大寺云々、大佛像最初造立より百七年を経て、齊衡二年五月五日御頭おのづから落る、第二の再建は高倉院天皇御宇治承四年十二月廿八日平重衡の兵燹に罹り、伽藍灰燼す、御頭鎔ながれて落る、其後後白河法皇右大

將頼朝醍醐俊乘坊重源上人に勅して再興建、久六年三月十二日大佛供養主上行幸頼朝參朝して、八木一万石黄金一万兩上絹一千疋寄進せらる、第三再建は正親町天皇御宇永祿十年十月十日松永彈正久秀三好康長戦争の兵火に罹り、御頭燒落、其後當國福住、人山田道安、富財と抛て修補す、然に大殿燒失、後佛体雨露よ曝され給ひし事百十余年、東大寺龍松院公慶上人、大殿再建の志願を發し、勅命を蒙り、勸進す、徳川五代將軍綱吉公、大殿建立、寶永元甲申年八月十九日大佛殿再建の大虹梁二本山城國木津川濱より奈良へ曳來る、此木の薩摩國より伐出す所なり、松長十三間四尺一寸、本口四尺三寸、末口三尺七寸五分、五葉松長十三間二尺八寸、本口四尺八寸八分、末口三尺七寸五分、鯖翁杖の趾、東の回廊の前にあり、伽藍の始、鯖翁あり、聖武天皇被をりして、大會の講師とまたまひしとそ、講堂跡、大佛殿の後、礎石あり、天平勝寶年中の造立、本尊五丈の觀音也、永祿十年の兵火に滅亡す

金銅燈爐 大殿の前にあり方八角佛像の形を鑄附又銅柱に阿闍世王經及施燈功德殿御建立の時鑄させ給ふ燈爐なり然るを其後火災に欠損したるを陳和卿補修する所なり

中門回廊の南門也 左毘沙門天 享保年間大佛師順慶の作なり 右持國天

南大門 仁王像は運慶湛慶作

因に云運慶後鎗倉に住し奥州藤原秀衡の爲に平泉寺の佛像を彫刻し眼に水晶を用ひしは是我邦佛眼に水晶を用ひし舊矢なり

石獅子 建久七年後鳥羽天皇詔して奈良東大寺の中門を建石の獅子と造り以て其内に置られ又詔して堂内に石を以て脇士及四天王の像を造らし石工は支那の六郎等四人なり六郎曰日本の石は物象を造るに於て支那に購求すべしと朝廷因て使を遣し石を取寄せ給ふ運慶の雜費三千石なりと皇國に於て外國の石を以て物象を造ると此より始る獅子今尙存と或書に見ゆたり藤而按るに彼獅子は永祿十年十月十日三好松永戰爭の際兵燹より懼り大佛及中門とも炎上り其時獅子は毀りたるを南門の中へ移せしものならん南門には仁王あり石の獅子の北面にて此門に對しては甚小なり是移し据たる証乎

西大門跡 國分門とも云雲井坂にあり金光明四天王護國之寺の額は朝野魚養の筆亦聖武天皇の宸筆とも云額于今存す

鐘樓 四間大鐘 延應元己亥年九月三十日鑄大勸進法印行勇大鑄師左兵衛定時小工廿人

鐘高一丈三尺六寸口徑九尺一寸三分厚八寸惣廻り二丈七尺熟銅五万二千六百八十斤白鐵二千三百斤延享二年十月大勸進公祥修補 按當初聖武天皇御建立之大鐘治承四年十二月廿八日兵火に鎔欠し延應二年修造せしあらん乎

俊乘堂 俊乘坊重源上人俗姓は瀧口左馬允季重三男刑部左衛門といふ出家して仁安二年宋國へ渡り天台山上に登り阿羅漢を拜し歸朝して黒谷源空上人の弟子とあり大佛殿二度目の浴室 光明皇后の御創立後に再建建立せし人なり

念佛堂 本尊地藏菩薩胎内の地藏は攝津國人遊女いとの念持佛あり良辨杉 良辨僧正幼童の時住たまへる跡なりを殖る此所かしらす良辨僧正の近江國志賀郡の人二歳の時母園に出て桑を摘小兒を木陰に置けるを大鷲來つて捕さる南都の義淵僧正春日社參の時鷲の子を弄するあり人音に驚き兒を捨て飛去る僧正拾ひ上げ養育し給ふ是良辨僧正なり 按に良辨僧正初名を金鷲といひしより幼兒の時鷲に捕み去られ給ふよしに言傳ふ乎

二月堂 綱索院と号す天平勝寶四年良辨僧正弟子實忠和尚勅定によりて造營あり本年二月朔日より十四日迄法會あり十五日後堂に涅槃會あり當寺は治承の兵火に残り寛文七年二月に回祿す佛像牛王の印無恙全九年再建本堂西向よて佳景あり北に長廊あり傍訶利帝毘沙門天を安置す又一丁許良の方に地藏尊あり石佛にて俗マナナチシの地藏といふ又南北二ヶ所に參詣 飯道祠 彦火々出見尊を祭る 遠敷祠 二月堂北人休足所等ありて參詣人無二間斷

二月ナツキノ瀧南手石壇の
下にあり

若狹井 二月堂開伽井あり毎年二月十二日夜此井水を汲を水取といふ○二月堂法會
ハ明治維新後毎年三月一日より十四日まで行ふ夜に入大松明を數本用也故
よ是を昔より世人おたいまつといふ

法華堂 三月堂と云金鐘寺又絹索堂とも云天平五年良辨僧正開基本尊不空絹索觀世
音菩薩良辨作東に不動明玉西に地藏菩薩梵天帝釋四天王北裏面執金剛神を
安置す此像の彫刻希世の妙工なりと云

大黒天 法華堂の良小堂の内に安置す市守長者持念といふ

三昧堂 俗四月堂といふ阿彌陀佛普賢十剎髮の塔聖武天皇の御剃髮
一面觀音不動毘沙門を安置す

正倉院寶庫勅封倉世に
三庫といふ

蘭奢待名香と始平城朝天皇御物珍寶數多納めあり富寶庫の御物ハ
紙筆に盡しつたし

富寶庫地の構内へ近年四聖坊の地を組込られいと廣くなり四圍築
塀を構へ晝夜守衛嚴重なり

指圖堂大佛殿の西の方にあり

圓光大師畫像を安置す

子安禰指圖堂の前東にあり

良辨僧正の母なり

勸進所大佛殿大勸進所なり戒壇堂の東にあり

本尊五劫思惟彌陀如來俊乘坊重源上人宋國より持歸り給ふ靈佛な
り其他釋定朝作の佛体等あり

戒壇院戒壇堂とも云
在永門北丘上 四天王塑像世に名高し

七大寺巡禮記曰戒壇院南向五間四面在大佛殿西南安六重金銅塔高
一丈五尺許置檀下中心是受戒會之本尊也檀下に埋聖武天皇御骨云
云天竺祇園精舍之内戒壇塔下埋釋迦佛鬚爪等也此塔埋聖武天皇骨

若准彼例云々とあり

天平勝寶七年唐鑑真持五臺山土建立戒壇天皇及右大臣百官等受戒始者在大佛殿前後移今所云々治承四年十二月廿八日爲平重衡兵火回祿其後再興永祿十年十月十日爲松永彈正忠久秀兵火回祿云々天正年大和納言秀長卿之後室慈雲院殿受戒堂再興本尊釋迦多寶二像安土階上也堂宇漸三間四面外巡有塀南向有門而已蓋慶長巳來東大寺興福寺御門跡代々有御受戒於此小堂壇上焉

享保十有年東武靈雲寺惠光比丘當寺入院自是戒壇堂再興享保十八癸丑年本堂二階樓御拜付悉成就安置五重小塔釋迦佛多寶佛並四天王土像始有繪圖堂内内陣土階高檻寶蓋甚嚴重なり南門一字同寺造營云々同十八癸丑年自二月廿日至同廿三日三ヶ日檀堂供養廿二日午刻衆

僧自真言院出仕導師靈雲寺惠光律師有音樂南都左右樂所各出勤云云同十九甲寅年春四圍築地成就有小門東西門前南石壇同新造畢云云

戒壇院僧坊本堂一字三間四面東正面瓦葺也方丈客殿表門裏門本尊觀世音菩薩傳云禁裏二間之本尊

古記云天平勝寶六年戒壇院建立鑑真和尚將來佛舍利三千粒之内別五百粒安置本堂也其後嵯峨法皇御受戒之時彼佛舍利納金塔高四尺許至于今有寺内焉十六羅漢繪像十六幅顏輝筆釋迦文珠普賢三幅對牧溪筆十六羅漢青磁二重底大香爐同花瓶其外和漢兩朝寶物靈佛有數多云々

玄武山廿五所山とも云舊上生院坊内に跡あり劍塚長辨僧正と辛國行者法力を争ひし劍を埋むといふ文遣ハ地蔵あり今存八幡池大佛殿前道の東類にあり嶋中辨護摩堂三月堂南不動明王安置新造屋護摩

堂の寶庫護摩堂南剃髮塔寶庫の南にあり

東南院聖賢尊師建立公慶上人再建 明治十年二月行幸の御時當院を以行宮とある

當寺本堂に復古一新の際迄東照宮の社を安置ありしが手向山神社

へ移し今ハ藥師如來歡喜天阿彌陀如來を安置す此のみだ如來は釘打の彌陀と稱して世に名高し

眞言院大佛殿と南大門、中間道、西にあり

本尊弘法大師御影 一鉢

享保十八年戒壇院住侶靈雲寺律師新安置大日如來四天王像と云

地藏堂一字在本堂西南正面 関伽井並護法善神跡石各善無畏三藏

所穿

三國佛法傳通記曰善無畏三藏於唐翻譯大日經後來日本國初着東大

寺西南之阿神龜五年頃あり云々 後弘法大師於此所建眞言院惣謂南院是也

と云々

寛永十八年十一月廿七日東大寺八幡社眞言院眞善院焼失と云々然

らハ其後再興乎

空海寺 在雜司村

本尊石地藏尊 弘法大師此寺に錫を止いるはの假名字を作たま

ふ所なり

古書より當寺靈窟享保十九年甲寅年三月本堂再建之時草堂及古來

の石窟石佛坐檀石等を壞と因之空海製工靈窟惜哉此時に滅すと云

々

知足院 正倉院の東丘上にあり

本尊地藏菩薩 當寺本堂再建皇政維新前なり

鐘樓釣鐘は明治十五年四月鑄之

轉害門又轉禮門東大寺西北の惣門也 俗景清門と云

建久六年三月大佛供養の日景清此門に隠れて頼朝を窺ふ秩父重忠是と察し景清を捕へしむと是妄談俗説かり景清は建久六年三月餘倉士卒に於て死す大佛供養の日衆徒梶原景時と互に狼藉の詞を發す將軍嚴命により小山朝光衆徒と耻めしむ静謐なきしむ和田義盛梶原景時武者所にして隨兵と卒ひて門々をたむ俗景時を誤て景清とするものなり

元慶四庚子年東大寺雷火延喜十一辛未年五月十日東大寺悉炎上とあり

東大寺國分門ハ永正五戊辰年三月十八日回祿

東大寺中御門ハ西面中央の門かり南に在國分門北に在轉害門因茲号當所中御門矣慶長十丙午年二月晦日祇園社并中御門燒失云々

西塔趾 水門の東道の北側

朝野群載曰西塔七重高二十三丈六尺七寸露盤高八丈八尺二寸露盤鑄具熟銅七万五千五百二斤五兩白鐵四百九斤十兩鍊金千五十兩云云天平勝寶五年三月三日造立治承四年甲午年十月廿九日爲雷火回祿

異本年代記曰後一條天皇万壽三丙寅年東大寺塔供養治承四年十二月廿八日東西七重大塔兵火

建治元年二月廿九日東大寺西塔再興定日取建立云々延文五壬寅年七重塔雷火已後無再建乎

東塔趾 八幡池の東方少し南

治承四年十二月兵火其後天福年中再建永祿六年雷火燒亡

新禪院趾 在眞言院南

寛永十九年十一月廿七日眞言院と同燒失其後再立寶永元四月十一日有火炎今廢亡也

或書云文治元年八月廿七日白河法皇御幸東大寺伊豫守義經着淨衣令供奉於馬上隨兵六十騎時爲新禪院宿所乎

西塔門跡 在水門南北通石橋 北詰東側

因云東大寺西室法藏僧都通土閻王喚鐘一口與法藏而後歷幾世堀出水門橋下春日本談義屋に納むと云々

興福寺 山階寺と云

古記曰興福寺和銅三年三月藤丞相不比等於平城建之其大殿之像者大職冠計討入鹿時如思於打得者造釋迦丈六像誓願如思打得故即奉造彼像也齋明天皇即位三年山城國宇治郡山階仁建寺安置本尊号山階寺其後天武天皇即位元年王城遷大和國高市郡其時山階寺移彼郡麻坂即名麻坂寺元明天皇御時王城遷大和國添上郡云平城宮此時大職冠男不比等麻坂寺移添上郡建立興福寺也

開山之事

興福寺建立之時分者智鳳義淵玄昉等也法相之碩僧數多有之別而開山僧之申傳無之候

山階寺流記曰天平記曰山階寺在左京三條七坊云々寶字記云西菓園二坊在三條六坊云々

明和二年記録日

一坊舎九十六知行高合九千七百一石九斗六升八合
一春日御神供、領米五千三十石余

此内千五百五十四石二斗余春日社 社家方
外、燈明料米千六百五十一石八斗余 禰宜方

一高米三千四百石余 唐院藏公物
一高米百六十石 小割方

一現米二万石春日社御造替料毎二十一年目毎三下行有之云々

金堂

今の金堂は假建にて文政二己卯年
九月廿四日再建

本尊釋迦如來長半丈六 脇士藥上菩薩
藥王菩薩各長一丈四天王、無盡畏、
妙幢、六祖、仁王、世親、無寂

等の像を安置し當堂の佛体いづれも希世の彫刻中にも世親無寂の

像ハ海内無比の良作なり

當堂當初本尊眉間の玉ハ面向不背の玉として釋迦の尊像中にうつり
て何方より見ても面を不背又頭の中に鎌足公在世髻の中に入れた
まふ釋迦長二寸銀像とこめたりと云々

東金堂

今の堂は應永廿二年
九月再建なり

本尊金銅藥師如來長八尺 脇士日光菩薩月光菩薩各長七尺五寸 文珠大士、維摩

居士、十二神將を安置し當堂は神龜三丙寅年聖武天皇元正天皇御
眼病御祈之爲勅所司奉造立云々已後六ヶ度燒失現本尊は應永廿二
年九月九日鑄造する所なり

五重塔

今の塔は應永廿六年より全廿八年迄之
再建供養は全廿八年十二月なり

東方藥師如來 南方釋迦如來 西方彌陀如來 北方寶生如來

東脇士日光佛南脇士文珠菩薩西脇士觀世音菩薩北脇士金剛曠菩薩

中尊各長二尺五寸脇士各長一尺五寸塔高十五丈一尺

南圓堂 八角寶珠形 西國巡禮第九番靈場 今の堂ハ 寛政元辛酉年四月六日再建

本尊不空羅索觀世音菩薩三目八臂丈六の像左の肩に鹿の皮を掛
たまふ像なり鹿の皮今ハ不見

當堂ハ弘仁四年閑院左大臣冬嗣公藤氏爲繁榮創立

新古今

補陀落の南の岸に堂たてし今そ榮へん北の藤波

淡海公の公達四人あり南家北家式家京家といふ此歌ハ北家の末繁

昌し給ふへき歌なり

堂前右方橋大樹左方藤あり 藤ハ水野石見守 殖る所なり

金銅燈爐 一基 正面少し東よりあり

火爐六角銘文ハ橋逸勢筆なりといふ又一説此文ハ空海の書なり按
に伊豆内親王西御塔 春日大鳥居東馬出 橋北手に跡あり 御願文は橋逸勢の筆なり是と

當火爐の銘文と誤傳へしならん乎

北圓堂 八角寶珠形 今、堂は文治四戊申年正月再建乎或記、應永六年二月十一 日上棟とあれども當堂構造古色應永前の造立ありと考

本尊彌勒菩薩長半丈云

脇士法花林菩薩 大妙相菩薩 各長 二尺

當堂當初元正天皇養老四庚申年勅長屋王造立全五辛酉年八月三日

藤原不比等と以漆朱の功成就せしめ給ふとぞ

又養老五年八月元明元正兩帝勅慮によつて草創ありしともいふ

三重塔 庚治二癸亥年十二月廿八日建

藥師如來 釋迦如來 阿彌陀如來 彌勒菩薩 畫像を安置す

當塔は康治二年八月待賢門院御願也

窪ノ辨財天又宇賀の辨財天と云今は此塔の内に安置す又其近傍に一言主祠趾あり

大湯屋 往昔の浴室あり

大釜 口渡四尺五寸胴六尺一寸
高四尺一寸厚二寸五分

大釜 西手芝の上に顯れ出る 口渡四尺七寸土
より出る高一尺厚二寸五分

當釜ハ永久五戊酉年鑄之

當屋ハ和銅三年創建其後燒亡應永年間假再建乎大衆蜂起之時爰
に集會して行ひありし所なり

菩提院

天平年間玄昉僧正創立應永の頃破壊し天正八庚辰年修繕す
大御堂と云里俗十三鐘ともいふ

本尊無量壽佛

西方觀世音菩薩

厨子に安置す兒觀音といふ

俗傳昔十三の兒童鹿を殺し此境内にて石子詰よせしと云は妄説なり信ふべからず
又當寺の梵鐘を十三鐘といふはむく！曉七時と六時との間に此鐘を撞き其音を

聞て塔中の若僧春日社に往て修行する事ありしより十三鐘と号しとそ此鐘復古
維新の後南圓堂の傍に移し日中時を報す

兒觀音といふはむかし朝欣上人といひしハ菩提院より有てある日初瀬寺に詣て歸る
さ鹿野園辰巳の松原にて日暮たり十三ばかりの童來て上人にすがり我に去たし
さものなし哀みたまへと申いとおはれに見へければ上人連歸たまふ六年許仕へ長
和二年三月十八日童子云やう我死たらん後棺に藏て鹿野園の松の上に置七日經て
開きたまへといひて息絶ぬ上人かたの如く取行ひ七日よりて棺を開けるに十一
面觀世音いましきこれを此寺に安置して兒觀音といふとそ

西金堂趾 南圓堂の北

當堂は天平六年正月光明皇后御母橘氏の爲に建立したまひし堂あり本尊釋迦佛眉
間に玉を入れざるに光明を放ちしとそ

食堂趾 東金堂北手の地

當堂本尊四十手觀音堂は明治維新之後破却し本尊は南圓堂傍龍華庵に移安す

大講堂趾 金堂の後

當堂本尊彌陀三尊安置淨明居士の像を置

鐘樓趾講堂趾前

鼓樓趾全上方

三面僧坊趾講堂趾の後

山門趾金堂前南

觀禪堂趾拍子神乾

東圓堂全上

南大門趾樓門にて金剛力士の二王の像を置此門敷石に澤瀉を彫付ありしより澤瀉

門ともひしなり

般若芝南大門額塚天平寶字八年五月南大門趾壇下月輪山の額を埋む

東惠門趾大湯屋の東

中門趾東惠門趾の北

東門趾中門趾北東

敬田門趾俗酢屋町門といひ

悲田門趾延乘坊門といふ

大峯門趾

正明門といふ敬田門趾の南興福寺衆徒大峰へ入る時此門より出たとそ

惣宮社趾五重塔花の井堂後八

重櫻今師範學校構内にあり

八重さくらいむめし東圓堂の前東圓堂の今師範學校構内

東金堂

の邊にも有しよし

一條院の御時ちらのみやこの八重櫻を人の奉りけるを御前に侍りければ花をよまはりて歌をよめどおはせられよめる

詞花集

いにしへのちらの都の八重さくらけふ九重にははひぬるかあ

伊勢大輔

沙石集曰上東門院とて后おはしましける八重櫻を都にめされしかは大衆いとびんなしたとへいのちのともわれ櫻を堀てぬこそまいたすましといひてあさうちあるわざなともありとかや女院かくときこしめし給ひて奈良法師はこころあきものところ思ひしがまことに色ふかして櫻はめさせなりける殊に伊賀國余野の庄をよせ給ひてそれより花のさかり七日があいた宿直どろをしてまもらせ給ひけるかくありければ余野の庄をあらためて花垣の庄とい名つけらると云々

又春日若宮神主祐茂といふ人八重さくらをつぎとめておのがせさいと植けるを大内に聞しめしあげられ其櫻をめされける堀て奉りあから

八重櫻けふ九重にうつされて古き都の春をさひしき

とよみて花にむすひける大内にも此歌をめてさせ給ひてさくらはあらへかへし給ひけるとあん

花の松東金堂の前にあり此松ハ元祿の初年當國添上郡古市村住人廣瀬佐次

右衛門と云人先祖爲菩提に爰に殖年を経て繁茂し維新の頃迄此松

の枝受杭廣瀬氏より年々寄付せしとろ

松ノ高十四間枝東西十八間余南北廿二間半目通廻三間半一ノ枝迄八尺二ノ枝迄九尺

春秋にかはらぬ色の花の松わふく梢に千とせをとする

昇 平

一 乘院宮趾 天平寶字已來相續 今奈良裁判所の地なり
當家は復飾し華族水谷川といふ

一 乘院大乘院は往古より興福寺事務職あり交代勤之

大乘院門跡趾 今飛鳥學校地なり當家復古
維新後復飾華族松園といふ

當院境内の林泉山あり池あり花木あり奇巖老樹山頂を鬼園山と云
觀音堂稻荷社池頭に茶室あり四時の佳景頗雅趣あり實に此地第一
の美觀なり惜哉明治維新の後建物破壊樹木伐切巖石散亂其形を失
ふ誰人の歎惜に堪ざらん明治廿二年鬼園山の北宇荒池に三條杉ヶ
町城戸の三村より溜池を掘穿貯水の余流を此境内に引入れ下流は
池の町の東より西に走り率川に合は

東室 興福寺事務所あり安政元甲寅年再建

興福寺築地は天正十七年五月十七日より大和大納言秀長卿大政所
一万石を以寄進造營する所なり堅固なる筋塀にて周圍四丁四方惜
哉明治一新之際破却也 明治廿二年に至り北円堂の北方より東へ
行南へ廻り南大門跡より三重塔の西迄築塙を再建す

三藏趾 一山の寶庫なり奈良裁判所の東

當寶庫明治維新の後破却し佛像經卷等數多散亂せしと云

中院屋趾 裁判所東

當屋境内に二層寶塔靈屋及酒漉浮葉華原葉等の寶器を藏めありし所なり寶器は今
傳へて山内の重寶たり

神龜古鐘 于今存在と

此鐘皇政復古之際春日社境内に園地を造りし時頃の横に穴を穿ち噴水器に用ひし事
あり

二基塔趾

春日社大鳥居より一丁許東馬出橋より
北手にあり

東塔西塔二基の跡なり東塔を号本御願と

本尊釋迦藥師地藏觀音赤拏檀の像なり天安二年建立

西塔号新御願と釋迦藥師地藏觀音後に文珠を作り添へ五佛とす各
白銀の佛体なりと二基塔應永十八年雷火靈佛無恙長講堂に移安
後に長講堂を滅亡し其有所を不知可惜

抑興福寺ハ和銅三年創建以來出火或は雷火兵火等の災害に罹り數
度の回祿古昔の儘相傳ふるものハ僅に佛体而已於此炎上度毎焦滅
たる處の金銅木塑漆之佛体及畫像經卷等擧て數ぬへから皇國著
名の靈跡も明治皇政復古の際富山は當初より春日社へ奉仕の寺た
るに依て寺祿奉還僧侶蓄髮して春日社へ神勤を此時に當り寺院傳

來の佛像經卷古書類に至迄數多散失し加之食堂と破却し境内四圍
の築塀を倒し南大門跡石壇を取崩し神武天皇遙拜所を設け塔中頽
廢金堂の佛像と他も移し清淨の梵宮變して堺縣出張所或ハ警察署
となり罪人を糺彈し又郡衙となり實に可歎の限あり然も近年藤氏
の貴族相謀り興福會を組織し伽藍保存の基本を起し金堂を修造し
如元淨刹となし明治廿一年四月十三日十四日還佛供養の大法會を
執行す此時久邇宮殿下山階宮殿下九條道孝公三條實美公水谷川忠
起殿臨場東大寺西大寺法隆寺其他諸山の僧侶參集し興福寺住職大
僧正園部忍慶大法會を修し皇太后官始貴顯方より金品寄贈物夥敷
爾來堂塔讀經香華絶る事なし

興福寺皇政維新の際僧侶復飾し堂塔伽藍境内存たるの外坊舎廢頽

し僅に残る一二の坊舎も民屋と變し往昔の姿を失ふ塔中ハ菩提谷
荒池山上登大路等にあり當世廢して唯字アヤナは殘る而已

薪能濫觴

薪能は弘仁十二年興福寺東金西金兩堂よて數多の花を飾擁護神を
供養す此法會晝夜の無別薪を焚唐人西金堂の前にて舞を奏す其後
清和天皇貞觀六年より五ヶ年間供養を廢む全十年大風雨木を折雷
聲山を裂く如く西金堂の前土陥り穴あき此穴南大門の芝に抜け通
る爰に於大衆驚詮議して擁護神の咎めならんと法會を南大門に移
して行ふ今春氏の先祖山城國薪に住す毎二月南都に來て猿樂す因
て是を薪の能といふとぞ

薪神事能に付達之寫

於春日二月薪神事能料米三百石并霜月爲祭禮役同料米貳百石都
合五百石事

今春寶生金剛此三坐之内二坐宛毎年神事能相勤役者共年々納之
以猿樂配當米之内被下畢此旨興福寺役者之出家へ可被傳達者也

寛文二寅六月七日

美 濃 (當時の老中)
豐 後

中坊美作守殿

興福寺炎焦及再建略記

和銅三庚戌年建立元慶二戊戌年四月八日堂宇僧坊燒亡延喜四甲子
年月日不詳坊舎燒失延長三乙酉年月日不詳堂宇不殘炎上其後再建

寬仁元丁巳年六月廿二日寶塔一基東金堂一宇地藏堂雷火長元四辛
未年十月廿四日寶塔東金堂再建供養寶德元甲申年月日不詳堂宇燒
亡永承元丙戌年十二月二十四日諸堂燒失同十二丁亥年七月十八日
上棟同三戊子年三月二日諸堂供養同四己丑年三月十一日北圓堂燒
失全七壬辰年月日不詳坊舍火康平三庚子年五月四日金堂講堂炎上
全年八月廿七日南圓堂西金堂火全六壬卯年諸堂再建治曆三丁未年
二月廿五日金堂供養承曆二戊午年正月廿七日五重塔供養寬治三己
巳年二月五日東金堂火全六壬申年正月十九日北圓堂供養永長元丙
酉年九月廿五日東牟婁僧坊出火講堂金堂回廊中門南大門鐘樓經藏
三面僧坊爲灰燼康和五癸未年七月廿五日造立供養天仁二己丑年北
圓堂供養天治元甲辰年十月六日五重塔供養康治二癸亥年十二月廿

八日三重塔建安元元乙未年北圓堂修造治承四庚子年十二月廿八日
平重衡兵火諸堂悉燒亡文治四戊申年正月廿九日諸堂上棟建久五甲
寅年九月廿二日堂供養建治三丁丑年七月廿六日金堂中室其他雷火
弘安元戊寅年十月十四日南大門上棟同二己卯年十月廿一日講堂供
養正應元戊子月日不詳大風所造講堂顛倒正安二庚子年十二月十五
日金堂其外供養德治元丙午年十一月廿七日東室不明門出火自馬場
門東炎上嘉曆二丁卯年三月十二日金堂其外諸堂燒失全三戊辰年七
月南大門柱立元德元己巳年四月十六日南大門上棟延文元丙申年二
月十一日東金堂雷火應永五戊寅三月十一日金堂供養全七庚辰年諸
堂供養全十五戊子閏十月廿五日金堂五重塔回廊大湯屋四足門雷火
全廿二乙未年九月廿九日東金堂再建本尊藥師如來像鑄る全廿六

年より全廿八年迄に五重塔再建全十二月廿八日塔供養文安元甲子
年十月西不明門諸坊火享保二丁酉年正月十四日講堂より出火講堂
金堂鐘樓鼓樓三面僧坊四面回廊中門南圓堂南大門燒失寛政元辛酉
年四月六日南圓堂再建文政二己卯年九月廿四日金堂假再建

元興寺

芝新屋山
在東側

本尊觀世音菩薩 二天王像と安置す

希代の良作也 當假堂は安政六己未年二月二十八日夜大塔燒亡跡
へ造立

觀音堂再建後内部造作不完全八佛無之

元興寺緣記曰人王三十三代崇峻天皇即位元年戊申十一月大臣蘇我
馬子宿禰新營作精舍於大和國高市郡飛鳥木葉宅号曰法興寺俗云飛

鳥寺三十四代推古天皇即位二年甲寅二月馬子宿禰新造丈六釋迦如
來銅像一軀爲本尊同四年丙辰年十一月伽藍造畢設無遮會

天武天皇恭敬飛鳥法興寺過他大寺再行幸當寺祈病有驗仍佛奉珍寶
多納田戸於是得法興寺号焉

元正天皇養老二年戊午八月勅遷作飛鳥寺法興寺於同國添上郡左京
五條四坊内所謂新元興寺是也新元興寺は法興寺と云元興寺の北寺
にて伽藍嚴重也

新元興寺緣記曰

金堂一字 五間四面二重樓閣并五間三面
中門廊

元正天皇養老六年壬戌六月勅改造大金堂先是本堂遷爲東金堂本尊
彌勒菩薩結跏坐脇士法華林
大妙相兩菩薩三軀木像勅佛土稽文會稽首勸

令作之○八尺四天王像四軀同十二月開眼堂宇供養因云芝突抜町舊名彌勒辻子と云是彌勒堂に通する道ありし故なり

元興寺講堂三面僧坊舊地ハ元興寺町あり

當寺ハ天平寶字元丁酉年五月開眼供養

大塔高二十四丈三尺 三間四面

食堂鐘樓趾 芝新屋町あり

金堂東面回廊趾 川ノ上突抜町

三面僧坊趾 川ノ上町邊

西金堂趾 井上町、西瓦堂町、東也

北室東室南室等皆横相列建其舊地ハ中新屋町西側なり

南大門舊地ハ中辻町辻より北東側裏邊

中辻町及廊坂籠の坂七軒町邊は往古の五條大路則京終町東西の通りにて新元興寺南大門前東西大路是なり

元興寺中門堂懸板記録曰

奉寄進畠地事

合三間者但七尺間畠地子間別八升宛八合升定

三間内一間者燈明料

所二間者毎年四月八日

命日斷所あり

在大和國添上郡廊辻子奥東通

四至 限東中垣 限南領地 限西大道 限北領地

右寄進狀如件

元亨三年四月 日

藤原氏春日女
僧 延實在判

依此考ふる時ハ籠の坂といふは元興寺伽藍跡にて廊辻子といひしなるへし

寶徳三年十月廿日諸堂南大門回廊俱に焼亡せしなり

西門舊地ハ東木辻前

花園ハ往古元興寺の僧坊椿の實の油を以爲燈學文其原料の椿數多ありし花園也按椿數多殖しハ今の花園町より南へ京終町東へ廣き花園なるへし 建久年間屋敷券文曰在添上郡元興寺南大門前南口字花園とあり元興寺中門堂懸板記錄延慶四年二月二十二日文にも添上郡元興寺南大門前南口字花園と云々

元興寺舊圖を觀るに東ハ鬼園山より南へ直經紀寺迄西ハ下御門通と南へ京終迄南ハ京終及七軒町紀寺迄北ハ鬼園山より東寺林町と下御門町迄と平城左京五條四坊内と云依是左に記たる所の小塔院極樂院十輪院金鉢寺は往昔新元興寺境内支院等なり

小 塔 院

西新屋町南端
在二西側一

新元興寺縁記曰小塔院昔ハ寶珠形二層八角塔壹基安置寶冠虚空藏菩薩等身坐像一軀并四天王像四軀諸寺雜記云光明皇后御願安置八万四千基小塔故号小塔院護命僧正影坐彼人自凡僧一度任僧正と云云今纔小庵一字殘る而已

又西新屋町西側に一字あり本尊地藏菩薩是小塔院遺佛なり
全町吉祥堂辨財天女の事ハ坊目考よ載てあり仍畧之

寶德三年十月廿日元興寺金堂小塔院極樂坊其余諸堂炎上すと云々

極樂院 元興寺中院也 中院山南側にあり

本尊阿彌陀佛 稽文會稽首動作

本堂客殿等古代の儘現存す

當院ハ智光和尚の住坊全僧の板曼陀羅あり世々名高し又西行法師手筆の經塔婆客殿天井の上よりありと言傳ふ

十輪院 十輪院町在北側

十輪ハ地藏菩薩の寶号なり當寺本堂ハ元明天皇宮殿なりと云々

坊目拙解曰十輪院ハ元來元興寺一院聖寶尊師開基其後聖寶移居于

東大寺也仍御影今尚存于當寺ありと云々

當寺境内に魚養の墳あり魚養爲僧法名号善覺大徳と云ふ

又云十輪院は元興寺一院也弘法大師踰海已往於此地游止從善覺大徳慣真名字篇了輒大斷壘岩造窟其表自彫石地藏菩薩爲中尊釋迦彌勒爲脇士文繁故摘其要 當寺の事委く坊目考にあり就て見るへし

金鉢寺 十輪院町 當寺由來不詳

坊目拙解曰南都舊史云元興寺一院南光院傳蹤謂此邊云々

南光院道昭和尙建立大乘院道若上古在于當所而後徙移於鬼園山南

光院十輪院別院聖寶尊師建立乎寶德三年同祿十輪院往古在人家号

東里と云

元興寺觀音堂懸板記祿元德三年家地買取券證文に在大和國添上郡

元興寺東郷十輪院之間とわり

璉玳寺 紀寺 當寺の事坊目考あり 在東側 遺漏と予は是記す

璉城寺は聖武天皇御宇行基菩薩開基あり號璉城寺其后破壊紀有常
朝臣再興仍名紀寺矣本尊裸形阿彌陀佛觀音大士行基作なり
或記曰紀寺濫觴ハ天智天皇御宇百濟高麗國等人譯田者今云通辭令
移居於諾樂縣而後建精舍号譯田寺即紀氏人爲檀越於是又号紀寺焉
坊目拙解曰當寺草創起天智天武兩帝之間延曆年遷都山州平安城時
に引徙譯田寺於洛陽即今誓願寺是なり
本尊阿彌陀如來釋文會 稍首動作復曰璉城寺ハ行基菩薩開基紀寺別院是なり
紀寺伽藍ハ南正面なり當代皆爲田地有常衰如伊勢物語貧窮不及氏
寺再興助力乎若父名虎有再興乎未知とあり

福智院地藏堂

福智院町
在東側

附清水寺濫觴之事

坊目拙解曰當堂西大寺興正菩薩の開基と云ハ非かり西大寺嚴覺大
僧正再興あり然と興正菩薩と誤り傳へしなり享保五年四月廿三日
大乘院門跡預荒池の土以て築地藏堂階壇本堂と東の方へ引とあり
或家舊記曰當寺ハいにしへ添上郡狹川村内福智といふ所にありし
と破壊し九十年代後宇多天皇御宇弘安年中西大寺興正菩薩今の所に
引たまふと云々

坊目拙解曰清水郷

下清水
中清水
上清水

三郷富郷往昔平城清水寺古跡而後号福智

院也天平八年丙子二月玄昉僧正奈良清水谷建寺安地藏菩薩清水寺
開基是也清水郷濫觴于茲始天平十七乙酉十一月遣玄昉法師造筑紫
觀音寺于時玄昉以弟子報恩讓與清水寺翌天平十八年丙戌六月十八
日太宰府觀音寺供養玄昉爲慶導師忽雷落捉昉頭是藤原廣嗣靈所

爲焉云々後報恩先師立助耻天死起厭離志願以清水寺讓弟子延鎮而入吉野山後天平勝寶四年報恩孝謙天皇祈不例有驗高市郡檜隈村子島神祠畔建一寺安一丈八尺自在像号子島寺也延鎮家觀音靈夢山州於音羽山移建清水寺是延曆十七年也同書曰法然上人建久年於東大寺大佛殿庇說法此時詣當所清水寺而有說法乎清水寺は中世廢頽建久甲寅年六月廿二日大乘院實信僧正福智院地藏堂造立供養也是清水寺再興福智院古繪圖本堂七間四而在經藏於本堂右方西如今福智院本堂非七間四方大殿疑者清水寺廢壞後遷安本尊地藏菩薩於經藏造四方庇爲本堂今現存の本堂なり云々復曰中清水町上古清水寺境内在僧坊寶庫院鎮守八王子神社池嶋於當邊石地藏菩薩在清水寺長隅將軍地藏尊其遺跡也と云々

按に福智院境内往昔廣大にして久保町邊に及ふ其證據は古書曰按福智院伽藍古圖久保町北側人家之裏に有井是昔鎮守八王子小社在池島上舊地乎後地變家屋となり地形窪く因て窪垣内の字となる歟とあり

新藥師寺

在高島 當寺來由坊目者にあり遺漏を訂し是記す

本尊藥師如來 十二神將

或家記曰養老三年十一月高市郡天香久山の邊の藥師堂を平城左京に移す行基菩薩勅を請て建ると云々 本堂古昔より火災無之境内二町四面高畑北東在東圓堂下高畑の北西在塔之内町是なり金堂の跡は上下高畑の中央なりと古書に見へたり 當寺境内に實忠和尚在石塔婆本堂坤の隅壇下也

五重塔趾ハ本堂外西の方なり

帆前神祠在_二南門_一 南京古記云當社興福寺二月十五日常樂會泛猿澤池

小船奉乘當神社仍号帆前神也是當社乎在別社乎

寶龜十一庚申大雷災京中諸寺新藥師寺金堂講堂西塔燒失と云々

般 若 寺 般若寺面
在_二東側_一

本尊文殊菩薩 日本三昧の一と云

當寺聖武天皇御草創堂宇治承四年十二月廿八日平重衡兵變一罹

其後文永年中興正菩薩再興と云々

按當寺當初堂宇燒失觀賢僧正再興本尊文殊菩薩釋忍性募衆緣造

所也此事元亨釋書一載たり

當寺由來平城坊目考に載て委し依て略記す

十 念 寺

南風呂田
北側にあり

忍性菩薩墳墓 在_二本堂東_一号_二忍性山_一

忍性菩薩行狀略頌曰良觀上人諱は忍性父伴貞行母は櫻氏和州城下

屏風に生建保五年七月十六日生年十一安貞元就師學問信貴山貞永

元十六歲居額安寺平群郡額田部村剃髮而出家下零嘉吉元年癸卯七月十二日

入滅年七十八云々嘉曆二年五月廿五日勅賜菩薩號矣

當寺來歴載て坊目考に出たり

崇 德 寺 大豆山町
在_二東側_一 号花骨山

傳云當寺開基緣譽休道上人者參河國人而其先家康公御少年時御手

跡爲師範矣上人性質好隱遯而古鄉幽居于當所慶長年中家康公宜任

寺院建立寺領所與旨難有嚴命固辭不應令旨因茲爲堪忍知行廻田五

拾石賜之云々

又曰野田山上禪那院珍海已講藥師如來長一尺餘遷坐富寺本堂北脇とあり

興 福 院

佐紀村在法連の西北佐保山下
號三法蓮山一淨土宗智恩院派

本尊阿彌陀如來

脇土

觀世音菩薩
勢至菩薩

本堂南面 鐘樓

靈殿德川家光公

庫裏 客殿

琉璃殿藥師如來

中門 表門

富寺は聖武天皇御學文所と和氣清曆に賜寺と成し弘文院と号添下郡興福院村にあり寛永年間今の地に移し興福院と改稱し祿二百石を賜德川三代將軍家光公台命に依り小堀遠江守宗甫普請奉行と成て修造す門前の松前樹久保權太夫野田号長暗堂殖る所なり皇政維新の際

伐切すと云

富寺ハ代々華族尼僧住職なり

西海戦死者招魂碑

本堂、西在「山頂」

此碑は明治十二年十二月十八日富寺住職勲修寺勇仙發起者金澤昇平、森勝次郎、小片喜代松等相謀明治十年西南役官軍戦死者靈魂招祭の爲建立す碑石ハ山州笠置山下より出す所あり

瑞 景 寺

佐保村大字佐保田の東にあり
禪宗

富寺正徳年中創立開祖即空和尚也

不 退 寺

佐保村大字不退寺

本尊正觀音

五大明王

本堂南面

五間
四間

阿保親王像堂内西の方

多寶塔本堂異方

當寺は在原業平創草平城天皇離宮萱御所の跡なりと云傳ふ
本堂の北は阿保親王墓ありと云然哉否

廢寺之部

本元興寺趾

當寺往昔地形を考ふるに東は中辻町辻より南岩井川に至西は綿町
邊より西へ郡山道大安寺宇長池邊迄夫より南へ岩井川迄直經乎
續日本紀曰元正天皇靈龜二年五月辛卯始徙建元興寺于左京六條四
坊是本元興寺もり豐浦寺葛城寺といひしも本元興寺の名なり
本元興寺緣記餘篇云靈龜二年五月遷豐浦寺於平城左京六條四坊爾

來稱豐浦寺曰本元興寺墾地七百三十二町云々

葛城寺趾 木辻村西南京終領耕田中にあり

新元興寺中門堂懸板記錄曰

奉寄進水田事

合二段者 字葛木所當二石十一合五夕升

歲末百五十文

在左京五條壹里廿六坪内

四至 限東畔 限南領地
限西際目 限北村領

右寄進狀如件

德治三年戊申三月十八日

尼妙法在判

是と考に葛城寺地は五條に係るその歟

續日本紀曰寶龜十一年正月庚辰十四日也大雷災於京中數寺其新藥師寺

西塔葛城寺塔并金堂等皆燒盡焉

按本元興寺寶龜十一年正月炎上

仁和三丁未年十二月晦日本堂一字無殘拂地燒亡後再興ある乎

肘塚邊水田の中に本元興寺七重大塔の礎石ありと云

因云本元興寺は六條より四條迄新元興寺は四條より三條迄興福寺は三條より二條迄概略如斯もの乎

服寺趾

富寺行基菩薩先妣爲菩提造營長中故号服寺今云福寺池其古跡なり

大堂趾 京終山天神社の北

本尊大日如來 相傳服寺の本尊なり今何れに有哉不知

禪定院趾 御所の馬場東

興福寺寺務相承記曰禪定院在左京四條三坊元興寺東富寺別院号飛鳥坊云々

寶徳三年諸堂悉燒亡

禪定院坊舍号南鵲院天文土一揆之時回祿乎

光林院趾 勝南院町東側

當寺ハ元興寺の一院後再興して号勝南院と寶徳年燒失乎

鶴福院趾 鶴福院町より不審ヶ辻子へ入北廉

興福寺龍華院屬院廢亡年曆不詳鶴福院町不審ヶ辻子へ入廉より南は東林院趾なり

千藏院趾 下高畑町南側西の端

本尊地藏菩薩小野尊作眞言宗維新前滅亡す

神宮寺趾

春日大宮巽の方銅燈爐南乎廢亡年曆不詳

神野寺趾

春日社本宮より良の方御蓋山と春日山の間北表の處乎〇一説に本宮ヶ嶽の南舎人親王の姫君出家して神野寺に住たまふ其跡ありと故に兩説を擧て以て世の識者に問ふ

香山堂趾

春日山絶頂南少東

天平勝寶年古圖に春日山頂上巽方能登川水源の上手に香山堂あり續日本紀曰天平勝寶元年五月崇福寺香山藥師建興法花四寺には各絶二百疋云々

按香山堂ハ藥師寺法華寺の如く伽藍坊舎在しなるへし今春日山絶

頂より南瀧坂道の北邊に石佛瓦類のあは其遺物なり

天地院趾 号法蓮寺

大宮氏舊記曰天地院號法蓮寺行基菩薩建立高山半中始建和銅元年二月十日戊寅山峯一伽藍古書即天地院名法蓮寺同二年三月五日畢天喜元年九月七日南向有五間ヒワタふき并佛像焼失とあり

按天地院ハ往昔春日山半腹より峰に至り堂宇ありし今上水谷と云も天地院の境内乎上水谷水船銘曰西金堂長尾社水船と彫たるは天地院西金堂前手水鉢ならん乎若然らずば香山堂西金堂手水鉢あるへし山内字親子不知といふ處廣き所有長尾社より北西へ下れは若艸山の後に出天地院火災後餘堂を東大寺二月堂上の山へ移せしの爰にも天地院の稱あり尙考ふへし

龍華樹院跡

大御堂東春日社
大鳥居の南

寺務相承記曰龍華院号西御所有四條五坊春日大鳥居南方相當菩提院東也南は池川西は寺沼山西向四足棟門北土門道東方大御堂而平土門藥師堂一字主殿御坊經藏等也不知何世廢亡

古書曰按正中二年七月聖信僧都燒拂禪定院堂塔已下龍華放向云々又曰龍華樹院は法務權僧正賴信康平年中宇山上に建立とあり

古書曰龍華樹院本所當初在于菩提谷荒池存伽藍梵宇此寺正曆年中移於富國菩提山其餘堂正中年間回祿後小堂一字鐘樓移建於勸修坊南隣号龍華樹院然當堂皇政復古際移建於南円堂傍又曰水上道坊藥師舊名龍華樹院と云興福寺別院本尊藥師如來弘法大師作井上小堂あり依て号水上云々此堂滅亡也

遍昭院跡

餅飯殿山西側にあり
大宿所と云

古書曰當所其先号落島郷其後因調進餅飯供御於春日興福寺名餅飯殿所謂遍昭院是也蓋此邊者往昔興福寺別院元林院四室遍昭院光明院等俱有坊舍而今稱七辨財天宮者祭所春日五坐攝社等也天文庚戌年春日社遍昭院謂回祿後世稱辨財天而已就中春日若宮御祭禮保延二年始被行之九月十七日其後亦後花園院天皇御宇十一月廿七日被相定之畢其先大和武士雖預春日祭禮衛護隨官府殿下之貴命耳乎爰建武年天下騷亂以來大和侍盛威而或兼行興福寺衆徒春日祭禮願主等寄事春日大明神而實者欲振己威權焉於此各兼興福寺家竟若官祭禮弓馬料米等神物悉爲大和武士卜知矣於此以當遍昭院爲大和武士神事齋易号大宿所然慶長年中十市筒井等大家自滅亡大和武士悉衰

微而未裔僅令相續至于今每年祭禮勤仕不怠處顯然亦云大宿所祭禮料米二百石從公儀賜之支配役往古成身院令執行其後同院從者半田氏請得此職事而竟為家業矣猶於大宿所者願主人令領知處勿論也とあり大宿所昔ハ表浦小家三四字築地惣門等ありしか未知何世廢亡異本合運圖曰天文十九庚戌年四月廿一日申刻春日社大宿所并橋屋燒亡云々

因記大倭武士春日大宿所願主人勤番次第

散在等

高市郡畝火山山西

越智姓物部

二万四千石余

大宿所毎年相詰

長谷川等

十市山城住

十市姓中原

十万石

大宿所隔年勤之

中川等

廣瀬郡箸尾住

箸尾姓藤原

六万石

大宿所隔年勤之

乾等

添下郡居城筒井村

大姓神

十二万石

大宿所五年目勤之

南等

高上郡金剛山麓住

南等

三万石

大宿所五ヶ年目勤之

光明院趾

光明亮川南町下御門西側也

當寺は往昔興福寺別院僧正實曉の住坊なり興廢年曆不詳

寶積院趾

小西町にあり

當寺ハ興福寺別院近代迄小堂一字北側に残り本尊觀世音を安置す今ハ廢亡す

華林院趾 中筋町にあり

當寺ハ興福寺の一院永緣僧正住坊なり

さくたひにめつらしけれハ時鳥いつも初音の心地社すれ 永緣

此名歌ニ依テ永緣僧正と初音の僧正といひしところ此僧正の傳記坊目考中筋町條下ニ委出たり

按中筋花芝東向小西等は往昔興福寺の寺院の跡なるハしと考

伴寺永隆寺跡 川上村東

當寺大伴大納言安麿建立仍號伴寺廢亡今東大寺三昧也

古書曰養老二年奈良坂東阿古屋谷立伴寺同五年辛酉二月廿三日奈

良坂東谷般若山之佐保川東山改遷立之云々本堂藥師如來

舊記曰往昔伴寺法師害岩淵寺之美童号伊王殿於若艸山下而自共殺害焉

於是兩寺互爲峰起基伴寺僧徒歷若艸山麓路而寄于岩淵亦岩淵寺大衆越於下道而至當永隆寺相互押寄空寺令放火兩寺同時回祿令滅亡也其後有再興云々彼兒與法師之遺骸葬於若艸山西南林下今云逢火塚是也東大寺要錄曰伴寺跡當時東大寺爲三昧所右幕府賴朝石塔左馬頭義朝阿波民部成良藤本權守俊乘上人重源石塔等先年在于念佛堂傍元祿十六年移改於伴寺山墓所矣

岩淵寺趾 白毫寺より凡十五丁許
東南字ガヲノホト云

當寺舊趾定めに知る人なし予明治廿二年十二月廿二日岩淵寺趾を探らんが爲白毫寺より山路東南に入事凡三千五百歩余にして篠原の中に廣く平らなる地あり西南の方眺望頗好景北は瀧坂の南岸高く聳へ是往昔伽藍地にもやあらんとおそへど人跡絶たる山中よ

て問ふ人もなく暫く木根を腰打掛憩ふ所へ樵夫一人來り予を見て驚きたる体にて此山中へは何用にて來りしやと問予答曰岩淵寺の趾を探らん爲來りし由を告彼者云此地ハ則字ガランボとて岩淵寺の遺趾なり是より下に今一所廣き所ありと云依て地形を視るに岩淵寺は南向よてありしや是より北の方瀧坂へ出る道あれとを難路なるへし然るを世人岩淵寺ハ瀧坂道より北或ハ南なりと喋々すれとも瀧坂道の近傍左右に立入伽藍跡と覺しき地勢を不見久代岩淵寺伽藍坊舎ありて大衆峰起の事ありて小寺にあらず其頃瀧坂邊より南へ越る道ありしなるへし地勢南降水ハ鹿野園の方へ落下流岩淵川となる今岩井川岩淵寺は鹿野園白毫寺の方より登るは本道ならん此寺も前説の如く南へ十の是を以考るに瀧坂道より北は香山堂の遺趾往昔小寺にあらず

五丁余入て岩淵寺の趾なり

眉間寺趾

佐保村大字法蓮佐保南陵内

号眺望山

本堂多寶塔鐘樓庫裏等趾は今御陵御構内半腹にあり

和州社寺記曰眉間寺ハ天平勝寶八年丙申五月二日聖武天皇御年五十六歳にして崩御し給ひ此所に奉葬傍に寺を建眉間寺と号すと云云

東大寺略錄抜萃曰天平寶字六年七月八日眺望山眉間寺建金色阿彌陀佛像聖武天皇御筆最勝王經同八年五月二日崩此地爲陵延長四年三月八日宇多法皇御幸應安二年九月十八日村上天皇臨幸其後永祚元年八月十三日依大風顛倒天永二年正月伊賀上人道舜勸進造營と云々

當寺文久年帝陵御修繕に付寶塔破却本堂庫裏と壇下に移り皇政復古後滅亡

野田法華寺趾

春日野、野田西、入口西側隅

本尊地藏菩薩立像小野葦作

本堂南面興廢年代不詳

野田觀音堂趾

全所東側

本尊十一而觀世音菩薩入厨子行基作

本堂南正面二間四方

興廢年曆とをらす

野田四恩院趾

春日野、野田東端

坊目拙解曰當寺興福院一院境内一町四方有築地表大門在東方裏

門在北面

十三重塔婆

四方正面
本尊觀音、藥師、阿彌陀、釋迦佛

鐘樓 在北方

浮雲神社 一座

西向在院内巽角

所祭武甕槌命 天照太神 天兒屋命 相殿と云々

世說當野田春日神宮者人王九代開化天皇卒川宮舊跡而所安鎮三種神器暫於此地也從是已降祝祭天照太神天兒屋命奉爲相殿也以在于春日山下号春日神社神護慶雲年前奉号春日社者謂當社也不可不知矣

延喜式神名帳曰大和國添上郡春日神社一坐是則當社也同神名帳云春日祭神社四座勿論今之三笠山春日四所明神以爲同所同名神宮諸

書傳史令混合焉

或秘傳云春日大宮四柱第四御殿姬太神者當初神護四年奉遷從當浮雲神社也云々

當社の事坊目考に出参照して見るべし

元要記第廿六卷曰四恩院元初四箇院之僧坤角經藏朝廷より御經奉納なり

乾角湯屋一町四面勅願所なり

十三重塔婆 白河院御建立云々

異本奈良年代記曰文明十一己亥年十一月廿二日土一揆賊黨の爲に十三重塔院内悉燒亡同十七己巳年四月十一日十三重塔柱立云々此塔滅亡年代を不知

禪那院趾

東大寺開東南院三社池之後在於山上村前大路西畑地古書に見へたり

當禪那院は東大寺の一院則珍海已講之住坊也盛衰記曰治承四年十月廿八日平重衡爲兵火珍海已講之禪那院八部感水底清神社佛閣悉燒たり

按禪那院治承四年已後無再興乎當世悉成田畑而稍謂傳禪那院畠の字而已

珍海已講能畫法華堂三月堂後執金剛神厨子扉繪良辨僧正傳記圖將門退治圖珍海所畫也其外佛畫等あり希世の妙手也

千手院谷觀音堂趾 若草山西麓

當初東大寺別院而在千手觀音堂宇本尊觀世音は元祿年間移安法華堂三月堂乾隅是なり○千手院鍛冶居趾宅千手院谷にあり往古當寺護

僧鍛冶を好故に号千手院と富寺興廢不詳

堀河天皇御宇千手院住僧而始作長刀是千手院流之始祖行信と云

里傳云源義經文治元年逐電以後隱居於勸修坊一説藏新禪院潜通千手院媛

而産女子其子孫爲東大寺衆徒末裔于今不絶云々

按千手院定生者如堂衆三綱等類乎觀帶妻有子孫時者不可爲清僧顯然乎定生好兵術而自翫冶工竟得妙手子孫後住居於手搔包永町爲寺

号家姓号千手院鍛冶也文珠四郎即出自此家也云々

白銀堂趾 春日野野田東北方山上

或云千手院谷西邊也

東大寺祿記曰山上白銀堂者行基菩薩開基也安銀丈六釋迦像故名銀

堂焉

相傳朱雀院御宇承平年平親王將門其初住于富銀堂後谷因幼名号山

上君而後引卒一族通當寺國分門趣關東令謀叛承平將門是也

白銀堂五間四面西向大佛殿去五六町許在山上本尊丈六盧舍那佛依

安銀佛名銀堂治安三年十月十七日同修行記云此佛爲盜人破取之召

師威儀鴻助此堂可修理云々其後何世歟廢亡

坊目遺考之部

此の坊目者、洩れたる説に記

肘塚町

當町玄昉僧正の肘塚ありに依て肘塚町と言傳ふるは非なり

坊目拙解曰建長五癸丑年十月十九日元興寺懸板記録寄進帳に甲斐

塚とあり往昔甲斐守なる人の塚なりしと俗謬て肘塚と言傳へしな

るへし甲斐守何れの人か未考とあり

築地之内町

當町元爲竹藪荒林在人家纔南奥と元興寺井上花園より通る四辻邊時之人字辻之内といひしより後世書築地之内と坊目拙解を見へたり然るを坊目考には新元興寺南門築地の跡なりとあれと古圖を考るに當邊築地にあらす拙解の方信に近めるへし

高御門町

當町寶徳三年十月廿日新元興寺金堂小塔院極樂坊其餘回祿高御門類焼而後無再建其跡へ民家を造立するを以て号高御門町と古書より出

下御門町

上古元興寺西門對高御門其下門と下御門と云此門廢絶之後民屋を遺建して号下御門町と云々

西寺林町

當町往古新元興寺境内よて有樹林号寺林と寺は元興寺と云西は對東寺林云々

當町上古元興寺興福寺兩寺境なり此町往古小路にて狹隘也延寶年南側人家引退け道幅を廣くすと云々

元興寺境内北は東西寺林南側限當町上古平城左京四條坊門通なり東寺林町

當町往古興福寺坊舎北側東角にあり号光林院故東寺林と云々按當町上古南側は新元興寺境内北側は興福寺境内なるへし

元興寺中門堂懸板記録曰德治二年八月廿四日之文東寺林辻子東邊
在元興寺内東寺林南邊とあり

勝南院町

當町東側は往昔元興寺仙光院の舊地なり此寺廢亡後新建一院名勝
南院按寶德年の燒亡也其跡民家となる依て勝南院といふ

鶴福院

當町ハ龍華院屬地みて鶴福院廢亡之後民屋を建町号とあると云

鶴町

當町上古禪定院境内にて西邊ハ新元興寺境内勿論乎然往年在禪定
院坊舍号南鶴院是當町濫觴也天文己後町家となる又極樂院町とも
云

高山町

當邊新元興寺東命堂古跡にて寶德三年火災其焦土の瓦礫置於此邊
依之おのづから爲山岳故と俗高山と云々

紀寺新屋敷町

當町南北邊は上古紀寺璉城寺境内なり古市山村鹿野園への通街是
左東京極大路にして所謂上古の上街道なり然に民屋を造建し新屋
敷と号しなるへし

下清水 此三町と上古清水郷と云
中清水
上清水

坊曰拙解曰當郷往古平城清水寺古跡にて後号福智院天平八年丙子
二月亥助僧正奈良清水谷建寺安地藏菩薩清水寺開基是なり因て清
水郷濫觴于茲始ると云々

又曰中清水町ハ上古清水寺境内在僧坊寶庫鎮守八王子神社池島於當邊云々

清水寺由來福智院地藏堂の條下に委云へり

下高畠町

當邊は上古新藥師寺大伽藍敷地也其後爲堂廟僧坊廢頽於是粗變田畑俗呼名高畑郷云々

因云高畑の字に鬼界といふ所あり里俗此地俊寛僧都從鬼界嶋歸住此所云其非なり俊寛於鬼界島死飯奈良事不見諸書是元弘年小野文觀僧止被流罪於薩州鬼界島而翌年後醍醐天皇重祚天下一統文觀有歸京後在于奈良矣俊寛僧都文觀僧正音相似亦兩寺共配于鬼界島僉同類也故後世誤而云此地鬼界島

久保町 往昔窪垣内と云

按福智院伽藍古圖當町北側人家之裏有井是昔鎮守八王子小社在池

島上舊地乎後地變家屋となる地形窪し因て窪垣内字とある歟坊目拙解に出

塔之内町

當町の起原ハ往古新藥師寺境内にて塔趾なるへし新藥師寺大塔趾ハ東堂より西なり然らハ塔の内ハ何塔の趾めとらす

享祿七郷記云新藥師郷塔郷とあり

公納堂町

古書曰當町濫觴往昔元興寺禪定院公納所在於公納堂町東端北側仍而爲町名禪定院則元興寺別院号飛鳥坊云々禪定院舊地十輪院以東なり其後變爲大乘院後に移建鬼園山南禪定院諸堂公納堂ハ權律師賴實建立なり

花 園 町 并に辰巳辻子

古記曰往昔元興寺僧坊椿實の油を以爲燈學文當町南側椿數多ありし花園なり故に花園町といふ元興寺中門堂懸板銘文曰
一奉寄進屋敷之事

合四間者字辰巳辻子所當二斗十一合
五夕升定
在元興寺南花園内

四至 限南大路

右寄進狀如件

嘉元四年丙午正月十八日

大法師善寂

右全斷懸板銘に曰
奉寄進屋敷之事

合三間者七尺間所當貳斗八合升定

在添上郡元興寺南大門前 南口字花園
辰巳辻子奥南迄

四至 限三福法師 限南路
限西殘地 限北中垣

延亨四年二月廿二日

建久年間屋敷券文曰在添上郡元興寺南大門前南口字花園とあり是
を以考に花園町ハ元興寺花園に疑なきもの也

瓦 堂 町

當町往昔元興寺金堂趾の西の方なり寶徳年回祿後瓦葺小堂一字竹
林の中にあり号瓦堂是此町の濫觴なり

綿 町

當町南北凡二丁木辻村と稱する原村なり此町往年綿商家數多あり

依て町名となると云

因云日本草綿濫觴

異稱日本傳第三之内類聚國史百九十九殊俗部曰桓武天皇延曆十八年七月有一人乘小船漂着參河國以布覆脊有犢鼻不着袴左肩著紺布形似袈裟年可廿身長五尺五分耳長三寸余言語不通不知何國人大唐人等見之僉曰崑崙人後頗習中國語自謂天竺人常彈一弦琴歌舞哀楚閱其質物有如寶者謂之綿種依其願令住川原寺川原寺大和國高市郡川原村にあり即賣隨身物立屋西廓外路邊令窮人休息焉後遷住近江國國分寺十九年四月庚辰以流來崑崙人如寶綿種賜紀伊淡路阿波讚岐伊豫土佐及太宰府諸國植之其法一間陽地沃壤掘之作穴深一寸衆穴相去四尺乃洗種潰之令經一宿明旦殖之一穴四枝以土搔之以手按之每旦灌水常令潤

澤待生芸と云々

治田辻

古書曰木辻村綿町口去南方少許謂野外街曰治田辻是往古甲冑鍛冶住居地なり故に治田辻と云々

阿字万字町

當町舊名阿知麻目なり

元興寺中門堂懸板記錄曰

奉寄進屋敷之事

合三間三尺者 所當五斗

十合定 歲末薪一荷

在元興寺西阿知麻目西南邊

四至

限東大道 限南領地 限西田際目 限北領地中垣

右寄進狀如件

弘安七年甲申八月八日

阿願在判

按阿字万字又疇大豆之兩說共近世附會俗說也懸板寄進帳堪爲証說
弘安七年以後宇多天皇御宇距今凡六百年前乎所稱阿知麻目尤古語
矣

南 中 町 往古謂中城戸町

東城戸南城戸の中間にあつたと以然の稱せし何れの頃より南中町
といひ來りしや未考

宮 下 町

當町率川神社南西邊於神地爲町家故謂宮下此町廢絶北向町に合併
する乎

北 法 蓮 町

坊目拙解古傳等を参考するに當地ハ松永久秀多門城没落後佐保川、
北田園となり無人家南法蓮も無人家新在家町の人家多く増築して
川の南涯に人家建連ぬ新在家出屋敷とす又法蓮寺の説を取り南法
蓮町とも云然後佐保田不退寺大村なりしを川の北涯に人家を引移
し北法蓮村とす川南を南法蓮と云より其に對して北法蓮と村名す
其後繁盛して今の村落となれりとそ舊名を廣岡といふ

按法蓮の稱は坊目考北法蓮町條下曰今按南法蓮は是則興福寺別院
にして法蓮法師の住所なりと云々とあり是を以考に法蓮寺は天地
院の号にて則和銅年春日山奥高山半腹の地に行基菩薩の建る所天
喜元年九月燒失其餘堂を南法蓮に移し法蓮寺と号せしより後に町

名となりしならん乎

多門町

佐保川、北涯佐保山南陵、東より全東陵の南を云

當町多門と稱する原縁は天正年松永彈正久秀佐保山に壘を築て出張し久秀常に信貴山多門天を信仰す因て佐保山の壘を多門と名く其壘廓の下に家屋を建て以當地の名となりしなり此地往古川上村の内にて高拾貳石九斗七升七合法蓮村之内高四石余承應四年田畑を潰し土を平らし屋敷とせしなり

多門屋敷千八百拾坪梅内土手道料、二千六百九十四坪與力同心屋敷、二千七拾坪與力同心畑地二百坪余四ヶ所門番の畑なり 承應四乙未年三月より四月に至、土引平し屋敷地に成る土代銀三百四十八匁土坪敷合百四十五坪人數合五百八十三人一坪に付四人貳厘掛

一人一日に付五分九厘七毛宛石代銀合四百九分六厘石敷合七百八十八人敷合千六百七十一人但一人に貳分四厘五毛合七百五十七分六厘萩野久兵衛勘定仕とあり

古書曰多門屋敷

東西六十間南北五十間

此地一乘院門主持地也自分作毛難成に付

東向町に馬借太郎兵衛と云者有此太郎兵衛に預置候明了院様御代白銀十枚寺主に被下屋敷御取被成候慶安三年に明了院様より右之地中坊美作守殿へ御預被成候寛文四年作州御奉行職御代り江戸へ下向之節右之地御門跡へ御返し被成候それより山に成候依而今此邊雉子屋垣内と申ハ雉子屋太郎兵衛預置之故あさかに成る云々此文意を考るに多門山一圓一乘院御門主の持あり其内多門屋敷地丈白銀十枚にて奉行所へ差出殘地を中坊美作守へ預に相成雉子屋

太郎兵衛支配せしなり

平城坊目遺考卷之下畢

